

『ペスト』におけるスペイン戦争の影

神 垣 享 介

序

1947年に上梓された『ペスト』は、ナチス・ドイツによるフランス占領下でのレジスタンス運動を寓意化した作品であることは周知の事実である。だが、『ペスト』執筆と同時期に、戦後の混乱した国内及び国外の政治的問題についてカミュが主に「コンバ」紙で筆をとった論説や記事が色濃く『ペスト』に反映しているのも事実である。そこでカミュが扱った主なテーマの一つにスペイン問題があるが¹⁾、スペインについての発言は何もこの時期に限ったことではなく彼の死まで一貫して続けられた²⁾。カミュは生涯、スペイン戦争で敗北した共和派を支持し続けるが、それは1936年2月の総選挙で《les institutions démocratiques qu'un peuple venait de se donner librement》(II,p.1604)である人民戦線政府がスペイン民衆の選んだ唯一の合法政権であるからであり、その合法政府を武力によって葬りさり、今なおスペインに君臨しているフランコを認めることは断固として出来ないからである。スペインに対するこうした執着(カミュによれば *fidélité*)は多分に《des raisons personnelles》(II,p.1606)に起因している。それは、母親がスペイン人であるカミュにとって《Par le sang, l'Espagne est ma seconde patrie》(II,p.1606)であるからだ。「コンバ」紙を中心に積極的にスペイン問題を論じたカミュではあるが、一見したところ『ペスト』にはその問題が十分に反映しているようには思えない³⁾。だが一度だけではあるが、ジャーナリストのランベールがスペイン戦争に共和派の立場で参加したことを明言する場面がある。『ペスト』のなかにスペイン戦争の痕跡を求めようとするわれわれにとって、これは貴重な手

掛かりになると考えられる。なぜなら、『ペスト』で現実の近過去の歴史的な事件が明示されるのはこの場合だけに限られるからである。年代記と銘うたれてはいるが、*«Les curieux événements qui font le sujet de cette chronique se sont produits en 194., à Oran»*⁴⁾(p.1219)という冒頭の文からも明らかであるように、1940年代の現代にも拘らず年号さえもが限定されていない。この事実だけをとりまいてもこの作品が現実の歴史を語るのではなく、あくまで寓話として意図されていたことが分かる⁵⁾。現代の年号さえ曖昧なものとする既定方針に反してまでも、1936-9年という歴史的な日付を持つスペイン戦争だけが例外的に作中で言及されている事実は、そこに作者カミュの何らかの意図を予想させる。われわれの目的は、スペイン戦争が『ペスト』全体に如何にその痕跡を波及せしめているかを作品に則して考察することにある。そうすることで、スペイン問題に寄せる当時のカミュの已むに已まれぬメッセージが読み取れると思われるからである。

I. オラン

『ペスト』の舞台はアルジェリア第二の都市オランである。カミュはオランについて幾つかのエッセーを物しているが、特に『ペスト』発表の年に書かれた「過去のない街のための小案内」において *«L'éclat cruel d'Oran a quelque chose d'espagnol»*(II,p.847), *«Pour le pittoresque, Alger offre une ville arabe, Oran un village nègre et un quartier espagnol»*(II,p.849)と記してオランのスペイン的特質を強調している。1936年当時、オランの人口20万人のおよそ半数がスペイン系であった⁶⁾事実からして、それは当然のことであろう。だが、Christiane Chaulet-Achour も指摘するように、『ペスト』では *«Camus insiste bien peu sur une autre caractéristique ethnique de la ville: son hispanité, non qu'il l'ignore mais parce que son objectif est autre.»*⁷⁾作品のテーマからしてカミュの目的がオランにおける民族的特質を探究することではな

かったことは確かである。だが、作品がペストを巡る寓話だとしても、『ペスト』でのオランに関する記述から「son hispanité」が殆ど削除されているにせよ、オランがペストを含めて「tout peut arriver」⁸⁾ような「un lieu neutre」(p.1219)だと形容されているにせよ、「la ville décrite est bien Oran」⁹⁾であり、そのことを証明する具体的な場所の記述には事欠かない¹⁰⁾。それ故読者は、『ペスト』のオランは架空の都市ではなく、幾分か抽象化されているにせよ現実のオランダと想定出来るのである。オランを現実の街として読むことによって、テキストから殆ど排除されたそのhispanitéを再びテキストに戻すことが出来るのではないか。それを可能ならしめるのは、現実のスペイン戦争が作中で言及されているからこそである。では、スペイン戦争との関係で見た場合、1936年から1940年代に懸けてのオランの状況はどうであったか。それは Abdelkader Djemaï が指摘するように「Fuyant l'Espagne, bon nombre d'entre eux (les républicains rescapés de la guerre civile) avaient trouvé refuge à Oran」¹¹⁾という状況である。つまり、スペイン戦争以前からすでに住民のおよそ半数がスペイン系であったのに加えて、フランコのスペインから逃れてきたかなりの数の共和派の亡命者がオランには存在していたという事実である。しかも、その亡命者のなかにはフランスのレジスタンス運動に参加した人達もいたのである¹²⁾。従って、作中で何度も繰り返される「nos concitoyens」のなかに、或いはレジスタンス運動を象徴する保健隊に参加する人達のなかにこれらの亡命者も含まれている筈である。そして話者のリウーが、ペストのなかで追放されている人々のなかでも「ils se trouvaient éloignés à la fois de l'être qu'ils ne pouvaient rejoindre et du pays qui était le leur」が故に「ils étaient les plus exilés」(p.1278)と記す時、その最も追放されている人々のなかにこれら共和派の亡命者が含まれていることは確かである。『ペスト』の世界にはこうした人々が潜在的に存在していると考えても差し支えあるまい。しかも、ペストが終結した後にも彼らだけは自分の国に帰ることは許されないのである。つまり、彼らにとっては「C'était toujours la peste」(p.1463)からであ

る。先で詳しく見ていくことになるが、ベシミズムの色調に彩られている作品の終結部はスペイン問題を抜きにしては論じることが出来ないと思われる。

II. ランベール

ランベールはパリの新聞社に務めるジャーナリストであるが、或る取材のために偶々オランに滞在していたがためにペストに遭遇するのである。彼はパリに愛人を残しており、且つ《je suis étranger à cette ville》(p.1288)であり、《je ne suis pas d'ici》(p.1289)のだから街を出ていく権利があると主張し、非合法な手段によってでも脱出しようとするあらゆる手段を講じるが、脱出が可能となると思われたまさにその時、街に留まる決意をするのである。ランベールの物語を要約すれば以上のようになるが、彼の物語にはスペイン戦争が色濃く影を落としているのである。彼はリウーやタルーによる保健隊への参加の要請に対して拒否するが、それには彼なりの理由があり、それはスペイン戦争の体験から生じた結果であると言う。《j'ai fait la guerre d'Espagne. (...) Mais depuis, j'ai un peu réfléchi.》(p.1351)と語る彼は《Du côté des vaincus》(p.1351)戦ったのだが、その結果、彼が達した結論は以下の如くである。

《j'en ai assez des gens qui meurent pour une idée. Je ne crois pas à l'héroïsme, je sais que c'est facile et j'ai appris que c'était meurtrier. Ce qui m'intéresse, c'est qu'on vive et qu'on meure de ce qu'on aime.》(p.1351)

スペイン戦争で彼が得た教訓は、観念は人を殺人に駆り立てるということである。それ故、現在の彼にとって最大の関心事は、観念ではないもの、つまり具体的に愛する者のために生き、死ぬことなのである。だからこそ、愛する者と再会するために街を出ようとするのである。こうした彼の態度はスペイン戦争に参加した人間としては正反対の立場に身を置いていることになる。なぜなら、スペイン人でもない彼が異国の内戦に参加したのは、

そこが決して自分とは無縁の場所とは考えられなかった、つまり «la démocratie n'a pas de frontières. Méprisée en un lieu, elle est menacée tout entière.»(II,p.1608) という認識からであったろう。他国にさえ赴いたランベールを、一転してオランから脱出しようとするまでに変えてしまったスペイン戦争体験とは如何なるものであったのか、さらには熱烈にスペイン共和派を生涯支持し続けたカミュが何故に敢えて共和派批判と受け取れる発言をランベールにさせたのか¹³⁾。その理由は、『ペスト』の前年の1946年に発表された「犠牲者も否、死刑執行人も否」において旗幟を鮮明にした、共産主義批判が根底にあるものと推察される。なぜなら、そこでカミュが共産主義を批判する用語、例えば«des idéologies meurtrières»(II,p.332), «le monde de l'abstraction, celui (...) des idées absolues»(II,p.332)は、ランベールの先の台詞に対応していると思われるからである。ところで、ランベールが参加したと思われる「国際旅団」はコミンテルン（ソビエト共産党を中心に結成された国際共産主義運動）主導の下に創設された義勇軍であり、参加者の大部分は各国の共産党員であった。だが、「この国際義勇軍に政治委員という党官僚組織が持ち込まれ、粛清というソ連邦の「大狂気」がスペインの戦線に持ち込まれたとき、国際旅団もまた「汚れた手」を持つようになった。」¹⁴⁾ランベールのスペイン戦争での失望はこうした事実に起因するものであろう。イギリス、フランスを筆頭とする西欧民主主義国家が「不干涉」の名目で共和派を見殺しにするなかで、ソ連だけが人員、物資の両面で援助していたが故に、「国際旅団」は言うに及ばず共和派内でも共産党が圧倒的な力を持つに至ったのは当然の成り行きであった。周知のように、共和派は一枚岩ではなく互いの政党が敵対していたが、共産党がその勢力を増すにつれて他政党への弾圧、粛清も強まっていった。共産党に対する激しい批判が共和派内部からもなされたが、そうした状況を Michel Winock は次のように記している、

«au sein du camp républicain, la lutte entre les communistes et leurs alliés supposés, anarchistes, militants du POUM (Parti ouvrier

d'unification marxiste) et trotskistes, en vue de s'assurer la direction politique. Or si de grandes voix se sont élevés, à gauches, pour dénoncer les staliniens, George Orwel, Simone Weil et d'autres, Malraux ne prononce jamais publiquement un mot contre les communistes pendant la guerre d'Espagne.》¹⁵⁾

カミュ自身は共和派内でも特にアナーキストたちを生涯支持する¹⁶⁾のだが、そうした彼にあっては「内戦のなかの内戦」と呼ばれる1937年に起きたバルセロナでの五月事件を筆頭とする共産党によるアナーキストや、コミンテルンに対立する反スターリン主義者によって構成されたPOUM (マルクス主義統一労働者党) に対する暴虐は許しがたいものであったに違いない¹⁷⁾。

ランベールは殺人へと駆り立てる「観念」に失望したとしても、決してスペイン民衆に失望しているわけではない。オランに留まる決意をするまでの過程で彼が付き合うのが主要な登場人物を除けば殆どスペイン系の名前を持っているか、あるいはスペイン人と明示される人たちであることがそれを象徴しているように思われる。そのなかでも特に脱出組織の連絡役を務めているゴンザレス、そして彼と同じ組織に属しているマルセルとルイの兄弟と、彼らの母親であるスペイン人の老婆が注目を引く。ゴンザレスとの最初の出会いの場面は、《des hommes, de type espagnol pour la plupart》(p.1339) によって占められている《au restaurant espagnol》(p.1339) あり、名前よりも先に彼が《avec un léger accent espagnol》(p.1340) 人物として提示されるようなスペイン的世界である。彼らはサッカーの話題から直ぐに意気投合するのであるが、興味深いのはこの場面の直後に《Je crois que je ne suis pas lâche, du moin la plupart du temps. J'ai eu l'occasion de l'éprouver. Seulement, il y a des idées que je ne peux pas supporter》(p.1341) というリウーに向けたランベールの台詞が置かれていることである。これは勿論彼が後に語るスペイン戦争体験を暗示しているのであるが、こうした言い訳めいた台詞をゴンザレスと知り合った直後に言わねばならなかったのは、彼がスペイン民衆に或

る後ろめたさ（フランコの軛から彼らが解放されていない状況で彼は自分一人の幸福を追求しているのだから）を感じているからであろう。ところで、ゴンザレスは以後ランベールを《un copain》(p.1344), 《un vrai copain》(p.1383)として扱うのであるが、それはランベールがスペイン共和派のために戦った事実と無縁ではあるまい。というのも、このゴンザレスが登場するのはランベールと一緒に限られており、最後にはランベールと同じく保健隊の仕事を手伝うようになるのだが、『手帖』によれば元々はタルーの知り合いであり、名前もゴンザレスではなくエチエンヌ・ヴィラプラナといういかかわしい人物であったからである¹⁸⁾。『手帖』での記述はゴンザレスがヴィラプラナに替わったのを除けば殆どそのまま決定稿に生かされており、予防隔離の収容所となっている競技場に保健隊の仕事を手伝うためにゴンザレスがランベールとタルーに附いていく描写のなかで用いられている(p.1415)。その場面の最初でゴンザレスは次のように示されている、《C'est un dimanche après-midi que Tarrou et Rambert choisirent pour se diriger vers le stade. Ils étaient accompagnés de Gonzalès, le joueur de football, que Rambert avait retrouvé et qui avait fini par accepter de diriger par roulement la surveillance du stade.》(p.1414)このように、ヴィラプラナからゴンザレスへの変更は単に名前に留まらず、彼らの名前そのものが象徴する本質的な人物像の変更なのである。最終的にこの場面でゴンザレスというスペイン名を持つ人物をカミュが選んだことこそが、ランベールとスペイン人との関係が如何に意図的なものであるかを示していよう。それ故、この場面に登場するタルーも必然的にスペインと結び付いた人物となるのである。

ところで、ランベールはゴンザレスを通してマルセルとルイの兄弟と知り合うのだが、後に彼らの母親もスペイン人だと示され、彼らもスペイン性を帯びていることが分かる。ゴンザレスがランベールのことを《un copain》, 《un vrai copain》と言うのは彼らに対してであることは暗示的である。彼らとランベールの関係を象徴するのは、脱出直前に彼らの《une petite maison espagnole》(p.1383)に三人が閉じこもっている場

面の描写である。《Comme Marcel et Louis, Rambert était torse nu. Mais quoi qu'il fût, la sueur lui coulait entre les épaules et sur la poitrine. Dans la demi-pénombre de la maison aux volets clos, cela leur faisait des torsos bruns et vernis.》(p.1386)彼ら三人はスペイン風の家の薄暗がりのなかで一つに溶け合っているかに見える、それはランベールと彼らとの融合を意味していると考えられるし、再び戦いに戻るランベールの通過儀礼とも読める。

彼らの母親については、《Les nouvelles de la peste étaient mauvaises. La vieille Espagnole gardait cependant sa sérénité》(p.1386)と記されているように、彼女はフランコに支配されながらもそれに動じないスペインの強靱さを象徴しているように見える。そして彼女はランベールに愛する人に会いに行くのは正しいとさえ言うのである、《Il faut la rejoindre, vous avez raison. Sinon, qu'est-ce qui vous resterait ?》(p.1385)スペイン戦争の体験を楯に街を出て行こうとしている彼にとって、彼女のこの言葉は先に指摘したような後ろめたさを彼に感じさせたに違いない。なぜなら、その直後にオランに留まる決意をリウーに告げる場面で《il peut y avoir de la honte à être heureux tout seul》(p.1389)と言っているからである。勿論、彼がこうした認識に達するにはリウーを始めとする登場人物たちとの交際が与かってのことであるが、ランベールをスペイン戦争との関わりのなかで見てきたわれわれにとっては、この台詞はスペイン民衆に向けた彼の新たな決意と読むことも出来よう。それ故に、彼にとってペストとの戦いは同時に新たなスペイン戦争でもあり、例えオランでのペストが終結しても不幸なスペイン民衆が存在する限り彼の戦いは終わらないのである。

Ⅲ. タルー

タルーの場合はスペイン戦争との関わりを明示する証拠はない。しかし、彼の言動の幾つかがスペイン戦争との関係を暗示しているように思われる。

何よりも先ず、彼が最初に登場する場面で«Il (Rieux) l' (Tarrou) avait rencontré, quelquefois, chez les danseurs espagnols qui habitaient le dernier étage de son immeuble»(p.1227)と記されており、又«la seule habitude qu'on lui (Tarrou) connût était la fréquentation assidue des danseurs et des musiciens espagnols, assez nombreux dans notre ville»(p.1236)とあるようにスペイン人との頻繁な交際が強調されている。さらには、一方の鍋からもう一方の鍋に豆を移すことで時間を計る喘息病みの«vieux Espagnol»をも度々（リウーと一緒にない時でさえ）訪れている。タルーのスペイン人に対するこうした愛着は、ランベールの場合と同様にスペイン戦争に起因していると考えられる。なぜなら、彼はリウーとの対話のなかで、父親が死刑宣告を求刑する人間である事を知ったことから死刑（殺人）のない世界を造るために政治運動に参加したが、その政治運動においてハンガリーで一つの処刑を実際に見たことで自分もまた間接的にその死に加担していた（他者の死の原因となり得るという意味でペスト菌保持者である）ことを認識するに至り、その結果«j'ai décidé de me mettre du côté des victimes, en toute occasion, pour limiter les dégâts»(pp.1426-7)と告白しているからである。彼はその政治運動については詳らかにしていないが、Jeanyves Guérin はタルーの«il n'est pas de pays en Europe dont je n'aie partagé les luttes»(p.1423)という発言を根拠に、«Tarrou a été un activiste de l'Internationale dans les années 1930»¹⁹⁾と断定している。Jeanyves Guérin のこの仮説を受け入れるならば、タルーとランベールは似たような経験の持ち主ということになる。なぜなら、タルーが1930年代に第三インターナショナル（つまりコミンテルン）の活動家であったとすれば当然スペインにも赴き、もしかしたらスペイン戦争にもコミンテルンの一員として参加した可能性²⁰⁾（彼が政治運動を離れる原因となったハンガリーでの処刑が何年のことなのか示されていないので断定できないが）もあるからである。ともあれ、われわれにとって興味深く思われるのは、両者に共通する政治への絶望感が共産主義に起因すると推測され得ることである。さらには彼らには

もう一つの共通点がある。それは彼らが外部からオランにやって来た者であるという事実である。それはスペイン戦争での海外からの義勇兵を想起させ、彼らにとってペストとの戦いはもう一つのスペイン戦争を暗示しているとも読める。しかし今回は観念（つまりペストが象徴する死をもたらす抽象）との戦いでもあり、抽象と対蹠にある人間を守るための戦いなのである。《j'ai décidé de me mettre du côté des victimes》と語るタルーだからこそ、ランベールがスペイン戦争をしたと言った時真っ先に《Du quel côté?》(p1351) と尋ねるのは当然であるし、それ故に、彼のスペイン人との頻繁な交際が何を意味しているかは一目瞭然だろう。だからこそ先で言及したように、保健隊の仕事で収容所になっている競技場にゴンザレスと共に赴くのが、ランベールとタルー（ゴンザレスが登場するのはランベールと一緒に、この場合のようにタルーも含めての場合に限られる）の三人であることも納得できよう。こうした彼ら三人の姿こそが図らずもスペイン戦争で負けた共和派の連帯意識を象徴しているように思われる。

IV. リュー

リューの場合はスペイン戦争との個人的な関わりを暗示させるものはない。ここでリューを採り上げるのは『ペスト』を物語る話者、つまり作品全体を統括し、物語の始めと終わりの決定権を有する者としてである。それ故、この場合リューはカミュ自身と言い換えても差し支えない。カミュは『ペスト』が《comme contenu évident la lutte de la résistance européenne contre le nazisme》(I,p.1973)を持っていると記しているが、彼にとっては《Le 19 juillet 1936 a commencé en Espagne la deuxième guerre mondiale. (...) Cette guerre est terminée partout aujourd'hui sauf précisément en Espagne》(II,p.1791) ののである。こうした彼の認識が『ペスト』の枠組みそのものを決定していることは間違いない。以下ではそのことを論証していく。

まず物語の冒頭部分で話者である医師リウーは、オランに関する考察に続いて幾つかの鼠の死骸が街で見かけられたと報告する。その直後にリウーが往診に向かったのは喘息病みの《un vieil Espagnol》の家である。その老人は鼠の話題に触れて《Ils sortent, on en voit dans toutes les poubelles, c'est la faim !》(p.1224)と予言する。この名前のないスペイン人は、先で見たスペイン人の母親（彼女にも名前がない）と同じく、ペストに対するその超然とした態度によってスペインそのものを象徴しているように見受けられる。その彼が誰よりも先に飢饉という言葉でペストを予言しているのは暗示的である。リウーにとってペストは、この老スペイン人の一言で始まったからこそ冒頭に置かれているのであり、従ってその象徴性は一目瞭然である。そして、カミュによればスペインで始まった第2次世界大戦はスペイン抜きで終わったのであるから、『ペスト』の終結部もそれを暗示している筈である。

終結部では、オランの解放が描写され、そして話者がリウーであることを告白した直後であるにも拘らず彼には語るべき《les derniers événements》(p.1468)が残っているのである。ペスト（第2次世界大戦）終結後に置かれている最後の事件とはコタールによる犬の殺害と彼の逮捕である。ペストと縁故を結んでいたコタールが犬を殺すのは、彼にとって犬の不在こそがペスト状態を示していたからである。《Il fallait observer et réfléchir pour rejoindre la peste. Car elle ne se trahissait que par des signes négatifs. Cottard, qui avait des affinités avec elle, fit remarquer par exemple à Rambert l'absence des chiens (...)》(pp.1334-5) それ故、コタールがペスト終結後に犬を殺害するのは、再びペスト状態を願ったのであるのは確かである。そしてこの場合の犬はその語源がespagnol である《un épagneul》（スパニエル犬）なのである、《un chien, le premier que Rieux voyait depuis longtemps, un épagneul sale que ses maîtres avaient dû cacher jusque-là (...)》(p.1470) ペストが終息したが故に再び姿を表すものの、その直後に銃殺されるこのスパニエル犬の運命は、ナチス・ドイツの敗北と共にフランコ・

スペインの崩壊も一時的には現実味を帯びはしたが、戦後の東西両陣営の冷戦の始まりと軌を一にして西側陣営によるフランコの維持政策によって儂くもその復興の夢が絶たれた共和国スペインを象徴しているのは間違いない。それ故、既に指摘したようにペストが終わった後でもオランに数多く存在する亡命共和派にとっては「C'était toujours la peste」(p.1463)のである。このスパニエル犬殺害が重要と思われるのは、リウーがその殺害を目撃するのは例の喘息病みの老スペイン人を往診する途上でのことであり、そして「le Docteur Rieux décida alors de rédiger le récit qui s'achève ici」(p.1473)のはその老スペイン人のアパルトマンの上のテラス²¹⁾であるからである。老スペイン人の予言で始り、スパニエル犬殺害の事件で終わる『ペスト』の最後でリウー＝カミュが「Mais il (Rieux) savait cependant que cette chronique ne pouvait pas être celle de la victoire définitive」(pp.1473-4)と悲観的に記さねばならなかった要因の一つがスペイン問題にあったことは明白である。

結語

以上で見てきたように、『ペスト』にはスペイン戦争の痕跡が色濃く反映しており、それは物語全体の枠組みそのものをも規定している。カミュがフランコを断罪し、敗れた共和派に共感を寄せるのは当然としても、彼は無条件に共和派全てを支持しているわけではなく、その暗部（共産党によるアナーキストや POUM に対する弾圧）さえも敢えて剔抉しているように見受けられる。『ペスト』で暗示された反フランコ、反共産主義はカミュが1946年の「犠牲者も否、死刑執行人も否」で表明した彼の立場を如実に反映している。そこで彼は二つのテーゼ、つまり「Vous ne devez pas parler de l'épuration des artistes en Russie, parce que cela profiterait à la réaction.」と「Vous devez vous taire sur le maintien de Franco par les Anglo-Saxons, parce que cela profiterait au communisme.」(II,p.332)を共に否定している。こうした彼の立場はイデ

オロギー色を強めていた当時のフランスの政治的状況のなかでの彼の孤立を意味した。しかし、彼は黙っていることはできなかった。それ程に当時の彼にとっては共産主義の問題と並んでスペイン問題が焦眉の急であったのである²²⁾。だからこそ、現実の事件や人名が悉く排除されている寓意的作品である『ペスト』のなかで唯一スペイン戦争のみが例外的な扱いを受けているのであろう。カミュにとっては、フランコ体制が終結しない限り、ペストは終わりとはならないのである。

「本研究は、平成8・9年度関西大学学術研究助成基金（共同研究）によって行った。」

（天理大学助教授）

〔注〕

- 1) 「コンバ」紙でカミュが論じたスペイン問題については、Philippe Vanney, <<La démocratie à l'épreuve des relations internationales: reconnaissance et ingérence>> in *EQINOXE 13*, RINSEN BOOKS, 1996, pp.37-49. を参照。
- 2) 共和国スペインに関しては Roger Quillot が作成した目録を参照。Albert Camus, *Essais*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1972, pp.1789-1791. (以下この巻からの引用は本文中にII, と記してページ数で示す。) その他 Roger Quillot が挙げた以外にカミュは「アルジェ・レピュブリカン」紙に1938-9年にスペイン戦争に係わる3つの記事を書いており、それらは *Cahiers Albert Camus 3 ★★*, Gallimard, 1978, pp.597-609 に<<Combat pour l'Espagne républicaine>>として Jacqueline Lévi-Valensi と André Abbou の解説を付けてまとめられている。
- 3) スペインが主要テーマとして登場するのは、『戒厳令』（1948年）においてである。
- 4) Albert Camus, *La Peste, Théâtre, Récits, Nouvelles*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1974. (以下 *La Peste* からの引用は本文中にページ数で示す。この巻から *La Peste* 以外の引用については I, と記して本文中にページ数で示す。)
- 5) エピグラフとして用いられたダニエル・デフォーからの引用がそれを証明し

ている。《Il est aussi raisonnable de représenter une espèce d'emprisonnement par une autre que de représenter n'importe quelle chose qui existe réellement par quelque chose qui n'existe pas.》(p.1215)

- 6) Rémi Skoutelsky, *L'ESPOIR GUIDAIT LEURS PAS Les volontaires français dans les Brigades internationales, 1936-1939*, Bernard Grasset, 1998, p.116. を参照。
- 7) Christiane Chaulet-Achour, *Albert Camus, Alger*, atlantica, 1998, p.136.
- 8) Jacqueline Lévi-Valensi, *La peste d'Albert Camus*, Gallimard, 1991, p.117.
- 9) Christiane Chaulet-Achour, *op. cit.*, p.139.
- 10) *Ibid.*, p.139.を参照。
- 11) Abdelkader Djemaï, *Camus à Oran*, Editions Michalon, 1995, p.54.
- 12) ピエール・ヴィラルール, 『スペイン内戦』, 立石博高・中塚次郎訳, 白水社, 1993年, p.146.を参照。
- 13) われわれは以前ランベールとスペイン共和派の関係について若干の考察を行ったことがあるが, そこでは共和派の内実を捨象して一括りにして取り扱ったためにランベールの共和派に対する批判はカミュの本心ではないと記した。それは一面的な見方にすぎなかったと訂正しなければならない。拙論『『ベスト』における「共和国の像」の意味』『天理大学学報』第50巻第2号190輯, 1999年, を参照。
- 14) 齊藤孝, 『スペイン戦争』, 中公新書, 1974年, p.130.
- 15) Michel Winock, *Le siècle des intellectuels*, Seuil, 1997, p.284. 尚, ジョージ・オーウェルやシモーヌ・ヴェイユのように共産党を公然と批判した作家は少数であり多くはマルローと同じく共和派の大儀のために沈黙を守った。H.R.ロットマンは次のように記している。「スペインで行動に参加していた作家の大部分は共産党の規律に服していたか, あるいは共和国の大儀のために進んでそれを受け入れていた。それはまた, 共和派側に立つアナキスト, トロツキストの志願兵に対する呵借のない粛清—しばしば公然たる反逆者として処刑されるところまでいった—を受け入れることを意味した。共和派につくようになった動機がどうあろうと, 遅かれ早かれ, 共産党によるトロツキスト狩りという明白な事実直面せざるを得なかった。だが, 通常は, 大儀のためにそれについて沈黙を守ったのである。」H.R.ロットマン,

- 『セーヌ左岸』, 天野恒雄訳, みすず書房, 1985年, p.139.
- 16) カミュは『『自由スペイン』の序文』(1946年)の注でスペインについて«Le seul pays où l'anarchie ait pu se constituer en parti puissant et organisé» (II, p. 1607)と記している。又, 1951年には«Alors le 19 juillet 1936 sera aussi l'une des dates de la deuxième révolution du siècle, celle qui prend sa source dans la commune de Paris, qui chemine toujours sous les apparences de la défaite, mais qui n'a pas encore fini de secouer le monde et qui pour finir portera l'homme plus loin que n'a pu le faire la révolution de 17. Nourrie par l'Espagne et, en général, par le génie libertaire, elle nous rendra un jour une Espagne et une Europe (...)»(II, p.1796)と記しているし, さらに1952年にはスペインのユネスコ加盟に反対する非共産党系の抗議集会で«C'est certainement en Espagne que le communisme a le moins de chances parce qu'il a devant lui une véritable gauche populaire et libertaire (...)»(II, p.784)と発言している。又, オランの出身でカミュの友人であるロブレスは, 如何にカミュがスペインのアナーキストに共感を寄せていたかを証言している。エマニュエル・ロブレス, 『カミュ 太陽の兄弟』, 大久保敏彦・柳沢淑枝訳, 国文社, 1999年, pp. 113-7. を参照。
- 17) ジョージ・オーウェルの『カタロニア讃歌』は, バルセロナの五月事件をPOUMの側から描いたものである。カミュは『手帖』で, ジンメル『ショウベンハウアとニーチェ』を英訳した Berneri について«tué par les communistes en Espagne au moment de la liquidation des anarchistes»と注記している。Albert Camus, *Carnets, janvier 1942-mars 1951*, Gallimard, 1963, (以下では *Carnets II* と略) p.191.
- 18) «Le dimanche d'un joueur de football qui ne peut plus jouer, le lier à Tarrou : Etienne Villaplaine, (...) Ce qu'étaient ses dimanches. Ce qu'ils sont : il traîne dans les rues, donne des coups de pied dans les cailloux qu'il essaie d'envoyer droit dans les bouches d'égout («Un à zéro», dit-il. (...) Il intervient dans les jeux d'enfants où il y a des balles. Il crache ses mégots et les rattrape d'un coup de pied (...)»)(*Carnets II*, p.122.) 尚, Etienne Villaplaine なる人物については, 大久保敏彦の訳注によれば, 独軍占領時代のバリにはレジスタン狩りをしたり, 闇取引をする暴力団まがいの組織があ

り、そうした組織の一つにヴィラプラナというサッカー選手上がりの人物がいたとのことである。『カミュの手帖 1935-1959 (全)』, 大久保敏彦訳, 新潮社, 1992年, p.256.を参照。

- 19) Jeanyves Guérin, *Camus portrait de l'artiste en citoyen*, François Bourin, 1993, p.79.
- 20) スペイン戦争が勃発する以前の1933年頃から「スペイン共産党には、コミンテルンから派遣された指導員が配属されていた。」ヒュー・トマス, 『スペイン市民戦争』, 都築忠七訳, みすず書房, 1990, p.71.
- 21) タルーガリウーに自らの過去を告白したのはこのテラスにおいてである。
- 22) スペイン問題に対する当時のカミュの切迫した心情を最もよく伝えているのは、『ベスト』の前年の1946年に発表された『『自由スペイン』の序文』である。II, pp.1604-8.を参照。